

氏名（本籍）	いく た なみか 生 田 奈美可（山口県）
報告番号	甲第5号
学位の種類	博士（健康福祉学）
学位記番号	健康福祉博甲第5号
学位授与年月日	2012（平成24）年3月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当（課程博士）
学位論文題名	死別による配偶者喪失を経験した高齢者のスピリチュアリティ に関する研究
論文審査委員	主査 教授 田 中 マキ子 副査 教授 長 坂 祐 二 副査 教授 三 島 正 英

論 文 要 旨

老いの過程である高齢期においては、死に向かう自らの終焉を、自らの人生の一部として受け入れている時期といえ、さまざまな側面の喪失体験を経験する。高齢者のライフスタイルが多様化してきている昨今、高齢者のそうした喪失体験に伴う問題に対して、スピリチュアリティの重要性が問われている。本博士論文では、配偶者を亡くした経験をもつ高齢期の人々のスピリチュアリティ概念を明らかにするとともに、配偶死別高齢者のスピリチュアリティ尺度を開発し、さらにスピリチュアリティ覚醒への介入方法を提示する。このことは配偶死別高齢者のスピリチュアリティの支援方法の一般化の一助となり、配偶死別高齢者のQOLの向上に寄与することが期待できる。故に、超高齢社会が進展する今日、欠くことのできない視点と言える。

本博士論文では、以下の調査により配偶死別高齢者のスピリチュアリティについての検討をすすめた。

まず、高齢者のスピリチュアリティの様相を、配偶者との死別経験の有無別に関し、出現の程度と構造について比較検討を行った。次に、配偶死別高齢者スピリチュアリティ概念の因子構造を帰納的に抽出し、その因子構造の信頼性・妥当性を検証した後、配偶死別高齢者のスピリチュアリティ尺度を開発した。最後に開発された尺度を用いた臨床応用へ向けて検討を行った。

こうした検討過程から、以下の事柄が明らかとなった。まず、配偶死別高齢者のスピリチュアリティ構造は、有配偶高齢者のスピリチュアリティ構造と異なることがわかり、配偶死別高齢者のスピリチュアリティ構造を捉えることの意義が明確に提示された。さらに質的帰納的な検証から、配偶死別高齢者のスピリチュアリティを構成する8つの因子構造（スピリチュアルペイン、存在の意味の探求、ひとりで生きる、繋がりの実感、感謝の気持ち、自己を超越したものへの関心、超越した存在への故人の配置、新たな「わたし」意識）が抽出された。抽出された因子の因子構造について確認的因子分析を行った結果、配偶死別高齢者のスピリチュアリティは、5つの因子構造（自己、他者、環境との調和、個人として生きていく覚悟、生きる意味や目的の探求、霊的存在としての故人の再配置、自己存在への問い）に再構成されることが確認できた。この5つの因子構造について信頼性・妥当性の検証を進めた結果、5つの下位尺度、26項目からなる、配偶死別高齢者スピリチュアリティ尺度；SAS-EBLS（Spirituality Assessment Scale of the Elderly Bereavement who have Lost Spouse）が開発された。本尺度の構成概念妥当性と併存的妥当性が確認され、26項目全体のCronbachの α 係数は.90で、5下位尺度は.71～.86であり内的整合性も確認できた。尺度としての有効性が明らかになったことを受け、尺度の使用方法を検討すべく配偶死別高齢者におけるスピリチュアリティ覚醒への方策として、SAS-EBLS下位尺度を用いた一般的臨床応用へ向けた具体的方策を提示した。具体的方策として、SAS-EBLSを用いた配偶死

別高齢者のスピリチュアリティ5因子観察モデルを提示し、スピリチュアリティ覚醒への介入ポイントを示した。配偶死別高齢者のスピリチュアリティ覚醒への支援の方向性として、SAS-EBLSの下位尺度の中心である【個人として生きていく覚悟】の重要性が示唆された。

以上より、本博士論文において開発されたSAS-EBLSは、配偶死別高齢者のスピリチュアリティを評価するために有効な尺度であることが示された。さらにSAS-EBLSを用いた配偶死別高齢者スピリチュアリティ覚醒への介入方法が提示され、一般化へ向けての一助となった。今後、SAS-EBLSを用いた配偶死別高齢者のスピリチュアリティ覚醒に対する事例介入を重ね、スピリチュアリティ覚醒のレベルを明らかにしていくことが課題として残された。

Abstract

A Study of Spirituality of the Elderly Bereaved who have Lost their Spouse

Elderly people experience loss experience of various types. When elderly people's life style is being diversified, they may have a problem with the experience of loss. Spirituality helps the elderly to maintain health. The purposes of this doctoral dissertation are to clarify the concept of spirituality of the elderly people who have lost their spouse and to develop a spirituality assessment scale for the elderly people and also to show the intervention method for awakening of spirituality.

The following investigations were conducted in this doctoral dissertation. First, the aspect of spirituality of elderly bereavement in individuals who have lost their spouse was examined. Next, the factor structure of the concept of spirituality was analyzed inductively. The reliability and the validity of the factor structure were verified. The spirituality assessment scale of the elderly people who have lost their spouse was developed.

The following results became clear. Through analysis of the spiritual experience of the elders who lost their spouse, 8 categories and 20 sub-categories were discerned. Sense of loss or the pain of the spouse's death put the bereaved into a category of (1) spiritual pain, which drove them to (2) search for the meaning of existence and behavioral (3) search of living by oneself. Through searching for the meaning and the purpose of life, the bereaved have experienced (4) actual feelings of connection, (5) gratitude, (6) awareness of transcendent existence and (7) allocation of the deceased to the transcendent existence. In the final phase, the bereaved found a harmony in relation to self, others, the transcendent and the deceased, and consequently acquired (8) consciousness of a new "self". The Spirituality Assessment Scale of the Elderly Bereavement who have Lost their Spouse (SAS-EBLS) was developed. The scale

consists of four areas and 26 items of (1) harmony with self, others, and environment, (2) preparedness to live as an individual, (3) an inquiry of the meaning and the purpose of living, (4) deceased disposed as spiritual existence, and (5) the question to self-existence. Criterion-related validities were investigated. Cronbach's α of 26 items was 0.90 and that of the 5 areas was 0.71-0.86. These results showed an internal consistency of the subscale. Furthermore, the concrete intervention method towards spirituality awakening using 5 subscales was shown. In order to assess spirituality of elderly people who have lost the spouse, a five factor observation model using SAS-EBLS was verified. The support method using the intervention point to spirituality awakening was clear. In the support of the elderly people who have lost the spouse towards spirituality awakening, the importance of [preparedness to live as an individual] which is the center of the subscale of SAS-EBLS was suggested.

SAS-EBLS developed in this study is an effective measure in order to assess the spirituality of elderly people who have lost their spouse. Further study would be to clarify the level of awakening of spirituality by case examination.

審 査 結 果

生田氏の論文は、超高齢社会を迎え、高齢者の保健医療福祉サービスを考慮する際、心理的・身体的・社会的アプローチのみならず、スピリチュアルな側面も考慮した総合的なアプローチが必要との視点に立脚し、中でも人生の最終段階で経験せざるを得ない重要他者である配偶者との別れから起こるスピリチュアリティの変化過程を踏まえ、どのような支援が必要になるかを検討した調査研究である。

論文は、2部構成となっており、1部では高齢期のスピリチュアリティの問題を時代の変化、発達との関係から概観し、スピリチュアリティとは何かの基本的理解に踏み込んでいる。スピリチュアリティの伝統的理解、WHO健康の定義改正案にみるスピリチュアリティの課題等を踏まえ、日本におけるスピリチュアリティをどのように捉えるかについて考察し、スピリチュアリティを定義している。また、高齢期の健康におけるスピリチュアリティの重要性について先行研究レビューを行い、研究動向の確認が行われている。その後、高齢期のスピリチュアリティに配偶者の有無が関係するのか否かを明らかにするために、配偶者との死別を経験した高齢者の精神的な健康について、有配偶高齢者との比較からその様相を検討している。結果、配偶死別高齢者の精神的健康度は有配偶高齢者と比べ顕著に悪く、出現も強く

現れると同時にスピリチュアリティ構造も違うことが確認され、本研究視角の意義が説明された。

第2部では、配偶死別高齢者のスピリチュアリティに介入するための方法として、状態を把握するための尺度開発を行っている。配偶死別高齢者スピリチュアリティの概念構造を、13名に対するインタビュー調査に基づき、質的帰納的検証から、配偶死別高齢者のスピリチュアリティの因子構造を明らかにした後、抽出された因子構造に対し確認的因子分析を行い、因子構造を明らかにした。因子構造の信頼性・妥当性の検証を進め、5つの下位尺度、26項目からなる配偶者死別高齢スピリチュアリティ尺度；SAS-EBLS (Spirituality Assessment Scale of the Elderly Bereavement who have Lost Spouse)が開発された。本尺度の構成概念妥当性と併存的妥当性が確認され、26項目全体のCronbachの α 係数は.90であり、5下位尺度は.71から.86であり内的整合性も確認された。

尺度としての有効性が明らかになったことを受け、尺度の使用方法を検討すべく配偶死別高齢者におけるスピリチュアリティの発動から覚醒を目指した臨床応用に向けた具体的な方策が検討された。方策として、SAS-EBLSを用いた配偶死別高齢者のスピリチュアリティ5因子観察モデルが提示され、配偶死別高齢者のスピリチュアリティ覚醒への支援の方向性として、SAS-EBLSの下位尺度の中心に位置尽く「個人として生きていく覚悟」の重要性が示唆されている。

生田氏が明らかにした内容は、死別高齢者の心的世界の諸相を捉えることのできる尺度の開発並びに介入支援に活かせる観察モデルである。高齢者人口の伸展並びに独居高齢者の増加が懸念される昨今、開発されたSAS-EBLSは、高齢者の精神的健康の維持・増進に寄与すると共に、介入ポイントを導く点において、高齢者のQOL向上に寄与できる実践ツールを呈示したとして高く評価できる。

しかし、残された課題もある。まず、尺度開発における調査対象者の配偶者との死別期間の差に関するバイアスの存在である。死別後5年未満・5年以上では、精神的健康の強弱の

差があるが、スピリチュアリティには差がないことが確認されている。死別後の期間の選定への検討と共に、結果の有効性について、複数例での検討の必要性が指摘された。また、スピリチュアリティの覚醒レベルについては検討がなされておらず、今後の発展的研究課題として期待された。

以上より、生田奈美可氏の研究は、今後の健康福祉学領域に対し、独創的かつ応用可能な知見を提示したものとして評価できる。

氏は、独立した研究者として、今後の活動を担える研究段階に達したと判断し、審査委員会の田中マキ子、三島正英、長坂祐二は、生田奈美可氏の博士論文を合格と判定する。